

〈書評〉

江原由美子著

『ジェンダー秩序』

(勁草書房 2001年 451頁 ISBN4-326-65251-9 3,500円)

上野千鶴子



本書は社会的文化的性別を意味する「ジェンダー」が、いかに社会的秩序のうちに構造化され、個々人の慣習的な日常の実践（ハビトゥス）をつうじて再生産されているかを、モデルとして提示する理論的研究である。著者によれば、「ジェンダー秩序」とは「ジェンダー化された主体に適用される相互行為上の規則や慣習の違い」をさし、「性支配」とはその結果、異なる社会的行為能力を付与されたジェンダー化された主体相互のあいだに生じる権力の格差をさす。

著者は、「性支配」をめぐる、(1)たんなる法規範上の平等に還元されず、(2)個人がジェンダー化される過程を説明し、(3)ジェンダー化された主体の選択肢の範囲の違いを論じ、(4)そのうえでジェンダー化された主体の選択能力を否定しないが、(5)にもかかわらずジェンダー化された主体の合理的な選択が性支配を再生産するような、(6)歴史的な起源ではなく構造的な再生産を説明できるジェンダー秩序のモデルをつくる、という課題をみずから設定してそれに挑戦し、それを一定程度達成した。

本書の構成は以下のようなものである。

- | | |
|-----|----------------------|
| 第1部 | 1章 予備的考察 |
| | 2章 ジェンダーの社会的構築 |
| | 3章 構造と実践 |
| 第2部 | 4章 ジェンダー秩序 |
| | 5章 ジェンダー体制 |
| | 6章 諸制度・儀礼・メディア・社会的活動 |
| 第3部 | 7章 ジェンダー知の産出と流通 |
| | 8章 ジェンダーと性支配 |
| | 9章 再生産・変動・フェミニズム |

第1部の1章「予備的考察」では、現象学的社会学者、ジェフ・クルターを援用して、性差を「心」から「心にかかわるふるまい」、すなわち相互行為の次元へとシフトし、2章で「ジェンダーの社会的構築」を、(1)構造主義・ポスト構造主義と、(2)言語行為理論・会話分析・エスノメソドロジーなどのふたつの構築主義の系列から、いずれも言説がジェンダー・アイデンティティを作り出すだけでなく、性別に応じて異なる「権利と義務」の範囲が課されることを明らかにする。3章「構造と実践」では、アンソニー・ギデنزの「構造化の理論」とピエール・ブルデューの「文化的再生産論」を参照しつつ、ジェンダーの社会的構築と性支配との関わりを考察する。ここでは「権力」を、相互行為における

「自己が目的とする事態に向けて、他者の実践を積極的に動員しうる力」と、社会的地位にともなう権限、すなわち「一定の社会的地位にある人々が行うことができることについての予めの規定」と定義し、その権力や権限において著しい非対称性が成立している場合を「支配」と定義する。すなわち「何を言うか」だけでなく、「誰が言うか」をめぐって、発話の資格が権力として付与されていることが「性支配」と名づけられる。

第1部が理論編とすれば、第2部は実証編というべきものである。4章「ジェンダー秩序」では、ロバート・W・コンネルの『ジェンダーと権力』を参照しつつ、特定の社会領域におけるジェンダー関係の制度化（ジェンダー体制）と、全ての制度を貫通し諸制度や制度間の関係をも構築する秩序（ジェンダー秩序）とを区別し、ジェンダー秩序が性別分業と異性愛からなるとする。5章と6章では、「ジェンダー体制」を「特定の状況や社会的場面において、性別カテゴリーと、活動・行動を結び付ける、成文化されたあるいは社会慣習上の規定」と定義し、家族・職場・学校・諸制度・儀礼・メディア・社会的活動という7つの下位領域を設定する。そのうえで実証的なデータを示しながら、ジェンダー秩序がジェンダー体制のもとでの「事実」と循環的な関係にあることを示すが、このような統計資料等のデータそのものが、社会的構築の結果であり、論証が循環的にならざるをえないことを補論で説得的に論じている。

第3部では、7章「ジェンダー知の産出と流通」で、日常知と科学的な専門知が結びついて、ともにジェンダー知を産出していることを論じ、社会的実践を規制していることを示す。8章「ジェンダーと性支配」では、ジェンダー知・ジェンダー秩序・ジェンダー体制の関連性が、ミクロな実践からマクロな構造にいたるまでフラクタル的に一貫していることを示す。ここまでの議論では構造の再生産は示せても、変動を論じることができない。最終章の9章「再生産・変動・フェミニズム」では、ひるがえってどのようなジェンダー秩序の再生産の現場においても、もとの秩序とは異なる意味が生産される可能性があることを示唆する。以上の要約に見られるように、射程の広い、本格的な理論書である。

従来のジェンダー理論は意識か実践か、行為か制度か、構造の再生産か変革かのいずれかの水準にかたよりがちであり、そのどちらをも通底して一貫性のある理論枠組みで説明することが困難であった。本論はその限界を破り、行為の意味を個人の内部にではなく個人の間の相互行為におくことによって、行為の水準から構造の水準まで、ミクロとマクロのレベルを貫通するジェンダー秩序の再生産と変動のモデルを示すことに一定程度成功した。

本書にも限界はある。一貫性のある理論のつねとして、本論にもジェンダー秩序を閉鎖系として循環論法で説明する傾向があり、その結果として変動についてはかならずしも十分に説明できていないうらみはある。だが、その限界は他のジェンダー理論家によっても共有されており、本書だけの弱点とはいえないだろう。実証データの使用についても、たとえば文化差や時代差を考慮に入れたら、著者のモデルでそのちがいを説明できるのか、という問題は残る。著者は9章で、80年代のフェミニズム言説が社会意識や社会的実践に影響があったと判定するが、これも著者の提示するジェンダー秩序のフラクタル理論から言えば、フェミニズム言説は変化の原因といえるかそれとも結果なのかについての判定は困難であろう。

本書は著者の、約30年にわたるジェンダー理論の集大成であり、現象学的社会学から出発した著者の、これまでの学問的な経歴が遺憾なく発揮されている。著者が「はじめての書き下ろし」というだけ

の労作であり、研究者の生涯に何冊も書けるようなものではない。「あとがき」で著者は、わたし自身も関与した「文化派對物質派」の90年代フェミニズム論争から端を発した問いに対して、「10年越しの宿題に答えた気分である」と記しているが、論争の当事者のひとりとして、みごとに球を投げ返された思いであることを付け加えたい。

(東京大学大学院人文社会系研究科教授)